

## 幼児から高校生までの自転車利用行動の変化過程

熊本YMCA学院 正会員 山下 秀作

九州東海大学工学部 正会員 渡辺 千賀恵

### 1. はじめに

最近の自転車交通問題は、①交通事故での被害者数の増加と②自転車利用者のモラル低下とに大別される。これらはいずれも交通安全教育に関わる課題である。自転車利用の交通安全指導は各家庭や小学校などで行われてきているが、現状では必ずしも体系化されているとは思われない。

交通安全教育は、自転車利用の実態や対象者の能力などに合わせて実施することが大切である。しかし実際には、園児段階から成人までの発達過程との関連で調査された例は皆無に近い。この研究では、4才（園児）から17才（高校生）までを対象とするアンケート調査に基づいて、年齢進行に伴う自転車利用行動の変化過程を考察した。

### 2. 会話形式の親子アンケート

アンケート調査の対象は熊本市内の園児から高校生である。熊本市交通安全対策課などの協力を得て、1996年3月に調査票を園・学校経由で配布回収した（回収 4,133部、回収率 87%）。

調査対象には、文字や地図概念を修得していない年齢層が含まれている。小学校3年生以下に対しては、会話形式の「親子アンケート」を試みた。すなわち、質問文を①子供用と②保護者用に分けて、子供用については親が質問文を読んで聞かせ、その回答を親に記入してもらった（表-1）。子供の年齢や自転車利用の開始時期など、親が回答できる項目は保護者用に盛り込んだ。

表-1 会話型式の質問文の例

質問：自転車でよく遊びに行くのは、どこ？

問：お子さまが答えた行き先を、地図に●印でお書きください。

### 3. 自転車による行動範囲の拡がり

#### (1) 「補助輪なし」への移行

以下、補助輪の付いた自転車を「補助輪付き」、補助輪の無い自転車を「自転車」と表現する。

「補助輪付き」から自転車に移行していく過程を

図-1に示した。子供たちは補助輪付きに慣れたあと、4～7才にかけて自転車へ移行しており、9才では大部分（97%）が自転車に乗れるようになっている。子供たちの自転車利用（遊び）は、小学校に上がる以前にすでに定着している。

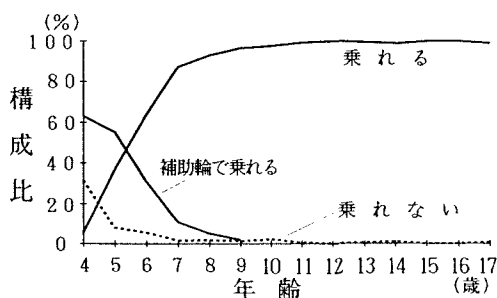


図-1 「補助輪付き」から自転車への移行

「自転車遊びは楽しい？」との質問への回答を図-2に示した。10才頃までは、「楽しい」との回答が90%ほどを占めている。しかし、その後は次第に減少して、16才頃になると「楽しくない」との回答のほうが多い。自転車は「遊び道具」から「交通具」へと、その機能を変えていくと思われる。

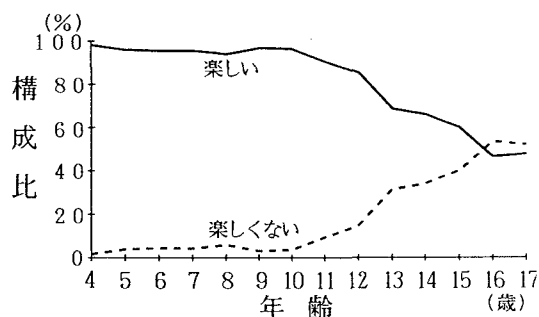


図-2 自転車乗りの楽しさ

#### (2) 移動距離分布の比較

自転車に乗るようになると、子供たちの行動圏は拡がるであろう。この点を調べるため、「徒歩」「自転車」による行動範囲を地図上に記入しても

らった。その結果、徒歩による行動圏は1km以内にとどまり、しかも年齢による変化は見られない。一方、自転車で行った「一番遠い場所」を見ると（図-3）、すでに4才児で1km以上にまで、また10才児で4kmにまで遠出している者が見受けられる。自転車の行動圏は年齢進行に伴ってかなり広域化している。

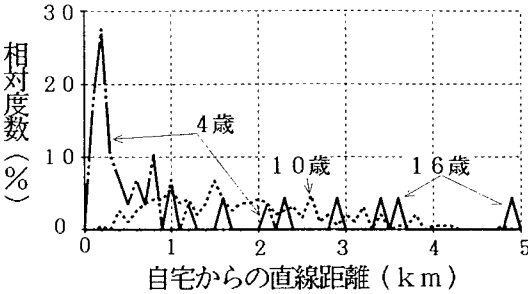


図-3 自転車で行った「一番遠い場所」

#### 4. 自転車利用と交通事故体験

自転車利用において最も懸念されるのは交通事故である。交通事故に遭った経験を質問したところ、4～8才児では、事故に遭った割合が約3%、遭いかけた割合（未遂）が約5%を占めており、その割合はほとんど変化していない（図-4）。しかし、9才以降において事故経験が急増して、17才では未遂を含めて55%が事故を経験している。これは「2人に1人」という高い割合である。

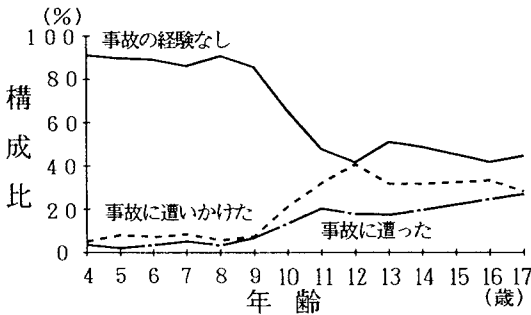


図-4 事故経験の年齢推移

事故経験時の子供側の交通状況を見ると、低年齢層では「歩行中」事故の割合が高く、高年齢層では「自転車乗り」が高い。両者の割合が逆転する時期は9～10才である（図-5）。

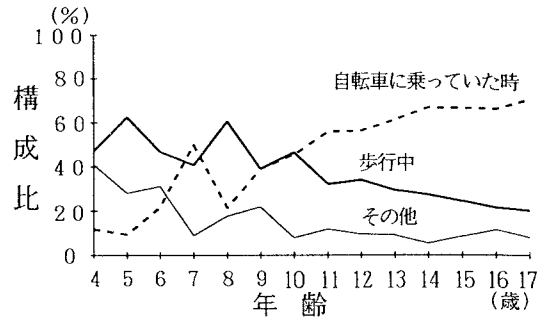


図-5 事故経験時の交通状況

クルマに対するイメージは図-6のように変化している。すなわち、4才児では「こわい」との回答が約66%と過半数を占めるのに対して、14才では約28%にまで減少しており、17才では再び50%近くにまで高まっている。

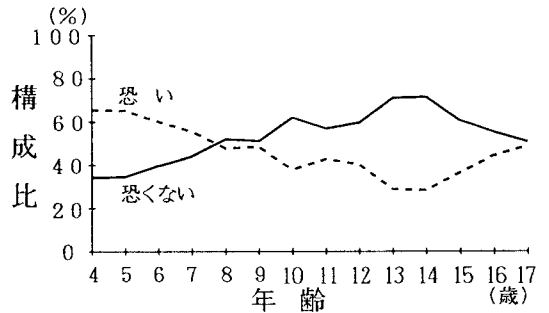


図-6 クルマに対するイメージ

#### 5. 結 語

以上、園児から高校生までを対象として、年齢進行に伴う自転車利用行動の変化過程を考察した。それらを整理すると、第一に自転車利用行動は9～10才を転換点として、その前後において変質している。第二に自転車は前半期では「遊び道具」として、後半期では「交通具」として使われている。第三に、クルマを「恐くない」と感じ始める時期に事故経験が急増を見せている。

こうした結果をみると、交通モラルの育成という視点からも、4～7才児に対して早期の交通安全教育を導入することが重要であろうと思われる。

#### 参考文献

- 1) 渡辺千賀恵・山下秀作「年齢進行に伴う自転車遊び行動の変化特性」、日本都市学会年報、第30巻、pp. 54～59、1996年。